日本庭園芸術論

中田勝康

日本庭園が芸術であるためには

1 日本庭園の特徴
1・1 日本庭園は世界的に見ても珍しいタイプの表現方法である　……1 頁
1・2 日本庭園が芸術であるためには　……1 頁

2 日本庭園の全体像の把握
2・1 日本庭園の系統樹による生成と発展の系譜図　……2 頁
2・4 各系譜の具体的な例の庭園写真　……4 頁

3 日本庭園が芸術であるためには、世界基準にかなう造形性と抽象性の視点で考える
3・1 抽象化度による庭園の区分の定義と概念図　……6 頁
3・2 庭園における抽象性の写真例　……7 頁

日本庭園が芸術であるためには

1 日本庭園の特徴

1・1 日本庭園は世界的に見ても珍しいタイプの表現方法である

日本庭園の素材は自然物であり、しかもその出来上がった造形も自然を写している。しかし、単に自然の造景を写しただけでは箱庭的な自然物のコピーであり、芸術とは言い難い。そこで、日本庭園の造景は自然の中のポイントとなる要素を抽象化するのである。自然を写しながらも抽象化された自然だ。このような創作分野は日本特有の自然に対する畏敬の念に由来していると思われるが、世界的な基準に照らして芸術と言えるためには、高度に抽象化される必要がある と考える。

1・2 日本庭園が芸術であるためには【中田勝康著『重森三玲　庭園の全貌』より抜粋】

庭園芸術の評価が難しい理由の一つは、素材が自然にある石、草木、砂、水であり、しかも、それらを使って造形された作品も、やはり何らかの意味で自然の風景であると言う点にある。多少下手な造形であっても、山や川があり、自然らしく作られていれば、ある程度の満足を得ることができるだろう。いわゆる自然の縮小コピーである。しかし、自然らしさを楽しむのであれば、自然そのものを楽しめばよいのであり、自然そのものに勝るものはない。庭園が芸術であるためには自然の素材を使いながらも自然を超えた形を創造すること、言いかえるならば、あるがままの自然ではなく、人が感じた自然、単なる自然を抜け出した、自然を超えたものを創造することが必要である。

庭園と類似の芸術として、「いけばな」を考えればもっと明瞭である。素材は草木であって、神の作った自然そのものだ。この自然の素材で自然を超えた形を創作することは、一見簡単なようで非常に難しい。もちろん、無造作に花を生けても、それなりに美しい情景を得ることができる。しかし「いけばな」が単なる自然ではなくて、芸術であると考えられているとすれば、そこでは、花が作者によって自然から切り離され、改めて作者が作り上げた独自の自然が再構築されていなければならない。言い換えるならば、「自然を一度解体して、作者による新しい造景を再構築」することである。造園や「いけばな」のように造形物が自然に近い分野の創作活動は、素材は自然であっても、造形は自然を超えたものにする必要がある。出来上がった造形物に感動を覚える理由は、生の自然の美しさにあるのではなく、その造形物に創造性があるからである。

なお、日本庭園に求める理想像を「癒される」「落ちつく」「しっとりとする」を求める場合は自然の野山に勝るものはない。ここでは日本庭園に芸術的な造形を求める との考えからの区分である。

2 日本庭園の全体像の把握

日本庭園を論ずる場合、個々の庭園を解釈するのではなく、まずその発生から考察し、外来思想の影響を受けながら多様化したと考える。これらの流れを以下のような系譜図で俯瞰的に把握すべきであろう。

2・1 日本庭園の系統樹による生成と発展の系譜図

庭園区分と系譜について（世界遺産に指定されている庭は庭園名、特別名勝は赤文字で表示した）

日本庭園を網羅的に示せば、ほぼ以下の 5 系列の系譜になる。

①神仙蓬莱庭園の系譜：亀島・鶴島・洞窟の造形で、飛鳥時代から現代まで続く縁起の良い庭。

②広大な池泉庭園の系譜：広大な敷地の池泉庭園【❶極楽浄土の庭・❷寝殿造りの庭・❸宮廷の庭・❹大名の庭・❺自然主義風景の庭】

③抽象枯山水庭園の系譜：平庭式抽象枯山水庭園で白砂に石を散在させる龍安寺様式の庭園を 3 区分した。

【❶禅宗の舶来～龍安寺に至る迄・❷龍安寺以降～江戸時代・❸重森三玲】

④石組み構成美庭園の系譜：自然石の組合せにより雄渾な空間構成を形成する庭を 3 区分した。

【❶戦国武将の庭　・❷安土桃山時代の庭・❸石組み構成美の庭】

⑤幾何学模様・グラフィックな造形庭園の系譜：小堀遠州に端を発したこの種の庭園は重森三玲によって充実した。しかし日本庭園としての歴史は浅いが、人類の普遍的な価値に適うと考え申請対象とした。

備考）**系譜の考え方**

系譜の表について：時代背景【外来宗教（神仙蓬莱・極楽浄土・禅宗）】を縦糸とし、天才作家（蘭渓・夢窓・小堀・上田・小川・重森）を横糸に織りなした表を考えた。即ち庭園における新しい潮流は、時代の動きに適合した造形を天才作家が生み出した。

2・2　5 つの系譜の区分についての考え方

①神仙蓬莱：古く発生したが、そのまま、現代まで受け継がれていますので単純な構成になった。

②広大な池泉庭園：これに行きつくには時間が掛ったが、5 つの類似の概念の庭は、「広大な池泉庭園」という、一つの概念で括れるのではないかと思いつた。これらは何れも大池泉庭園で、時代の覇者の庭だ。

我々が名園として思い出すのは、苔寺・天龍寺・金閣寺・桂離宮・六義園・後楽園などであるが、時代の覇者の庭園のみが日本庭園を代表するのではなく、以下の③④⑤を含めた多様な庭も世界遺産の申請対象とした。

③平庭式抽象枯山水：この系譜を確立することは日本庭園会において急務化と思う。

禅寺といえば龍安寺と大仙院で終わってしまったのでは、日本庭園の枯山水の神髄が明らかにならない。

そこで以下のように考えた。

・原点の確立（龍門寺・建長寺。碧巌寺・永保寺・瑞泉寺）

・龍安寺に至るまでの流れ【本当の龍安寺の姿を確認し、龍安寺に至るプロセスの確立（プレ龍安寺の確認）】

・ポスト龍安寺の確認（龍安寺を超える庭の生成過程の体系化）

（円通寺・雑華院の仮想修復・龍安寺より抽象化した庭の発生過程～東海庵・久留島家・玄宮園・重森庭）

④石組み構成美の庭：上記③の枯山水庭園と別の系譜を作るべきと、思いついた。

（上田宗箇の庭などと龍安寺は同じ範疇ではなく、龍安寺の価値とは別の価値を見出す必要があると考えた）

・その原点は京極家庭園跡（現時点では最も古い戦国武将の庭）とした

・戦国武将の庭や上田宗箇の庭・粉河寺・阿波国分寺・楽々園など。

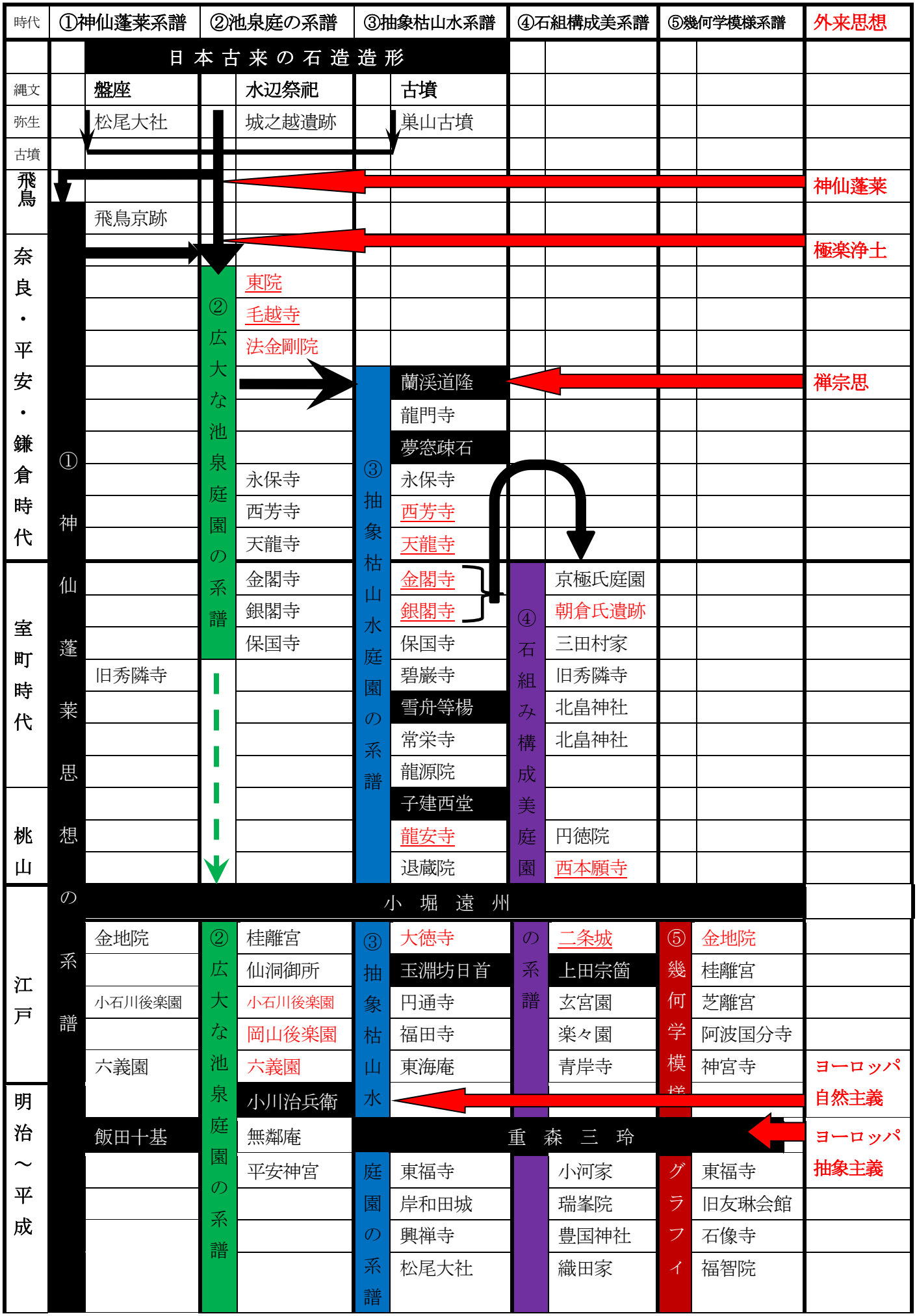
・これらの庭は、**自然石を人工的に配置することで、新たな価値を見出す日本特有の芸術ジャンルと思う。**

⑤幾何学模様の庭：当初は重森のグラフィックアートとしての庭だけと思い、系譜を考えなかったが、小堀遠州の金地院・仙洞御所や桂離宮・大通寺（学問所跡）や旧汲月亭（長浜市）・阿波国分寺・神宮寺を観察することで、幾何学模様の系譜に思い至った。

この系譜の庭園例は少ないが、この系譜は外国人にも解り易く、人類の普遍的価値に適合する体系として意味がある　判断した。

日本庭園の系統樹による生成と発展の系譜の表を次頁に、庭園の具体的写真を 4 頁以降に示す。

2・3 日本庭園の系統樹による生成と発展の系譜図（世界遺産に指定は庭園名、特別名勝は赤文字で表示した）



2・4 各系譜の具体例の庭園写真

5 つの系譜ごとに具体的な庭園例を以下に示す。

①神仙蓬莱庭園の系譜：道教の影響下に形成された神話で、不老不死、亀島、鶴島である。庭園に反映されたのは秦の始皇帝で、さらに漢の武帝である。日本では飛鳥時代に始まるが、不老不死への願いと、縁起が良いとのことで現代まで続いているテーマである。

飛鳥京跡苑池（奈良県明日香）

旧秀隣寺(室町時代)鶴亀蓬莱山

金地院（江戸時代）鶴亀蓬莱山

②広大な池泉庭園の系譜＊備考：広大な敷地の池泉庭園であるが、各時代の風俗や宗教の影響を受け時代ごとに変化する。その原点は奈良時代の❶極楽浄土の庭の庭に始まり、平安時代になると❷寝殿造りの庭になり、江戸時代には❸宮廷の庭や❹大名の庭になり、大正時代には❺自然主義風景の庭に発展してゆく。

❶極楽浄土の庭：東院

❷寝殿造りの庭：法金剛院

❸宮廷の庭：桂離宮

❸宮廷の庭：修学院離宮

❹大名の庭園：小石川後楽園

❺自然主義風景の庭：平安神宮

③抽象枯山水庭園の系譜：平庭式抽象枯山水庭園で白砂に石を散在させる龍安寺様式の庭園を 3 区分した。

❶鎌倉時代の禅宗の舶来～龍安寺に至る迄・❷龍安寺以降～江戸時代・❸重森三玲（現代）

❶禅宗の舶来：龍門寺

❶禅宗の舶来：常栄寺

❶禅宗の舶来：龍安寺

❷龍安寺以降：福田寺

❷龍安寺以降：来島家

❸重森三玲（現代）：松尾大社

④石組み構成美庭園の系譜：自然石の組合せにより雄渾な空間構成を形成する庭を 3 区分した。
❶戦国武将の剛健な庭　・❷安土桃山時代の絢爛豪華な庭・❸石組み構成美の庭

❶戦国武将の庭：朝倉遺跡

❷安土桃山時代の庭

❸石組み構成美の庭：徳島城

⑤幾何学模様・グラフィックな造形庭園の系譜：小堀遠州に端を発したこの庭園は重森三玲によって充実した。日本庭園としての歴史は浅いが、人類の普遍的な価値に適うと考え新しいジャンルとして提案する。

小堀遠州：金地院

小堀遠州：仙洞御所

阿波国分寺

芝離宮

重森三玲：岸和田城

重森三玲：福智院

＊備考)

一般的には我々がよく知っている苔寺・天龍寺・龍安寺・金閣寺・銀閣寺・桂離宮・後楽園公園・平安神宮はいずれも広大な池泉庭園である。これらの庭は日本庭園の全体像から見ると偏った庭園の系譜に属している。確かに大きな庭は公園的要素があり楽しい庭である。貴族の庭、将軍の庭、大名の庭、財閥の庭である。これらの庭に属さなくても芸術性の高い庭は全国に多くある。田舎の小さな庭にもスポットを当てて日本庭園の芸術性について考察したい。

3 日本庭園が芸術であるためには、世界基準にかなう造形性と抽象性の視点で考える

日本庭園の造形は具象的造形から象徴的造形を経由し、次第に抽象化した造形に推移した。庭園の芸術性を考える際には、造形の抽象化度を判定基準として考慮したい。ここでは以下の 1～3 段階に大別し、さらに各項目を①②に細分化した。以下にその全体像を示す。当頁ではその全体像を示し、次頁以降では実際の庭園例を示す。

3・1 抽象化度による庭園の区分の定義と概念図

1 具象的造形

①自然の中にある庵・東屋の風景（自然そのものを眺める田園風景）

②箱庭的に自然を模倣した造形（自然の要素を取捨選択せずに、あれこれ取り込んだ造形）

2 象徴的造形：自然の風景をデフォルメ（やや抽象化された造形）したり、物語を視覚化した造形

①自然風景のデフォルメ（表象化）した造形（例えば磯・洲浜など）

②神話・仏典の物語を視覚化した造形（例えば蓬莱山・須弥山・極楽など）

3 抽象的造形

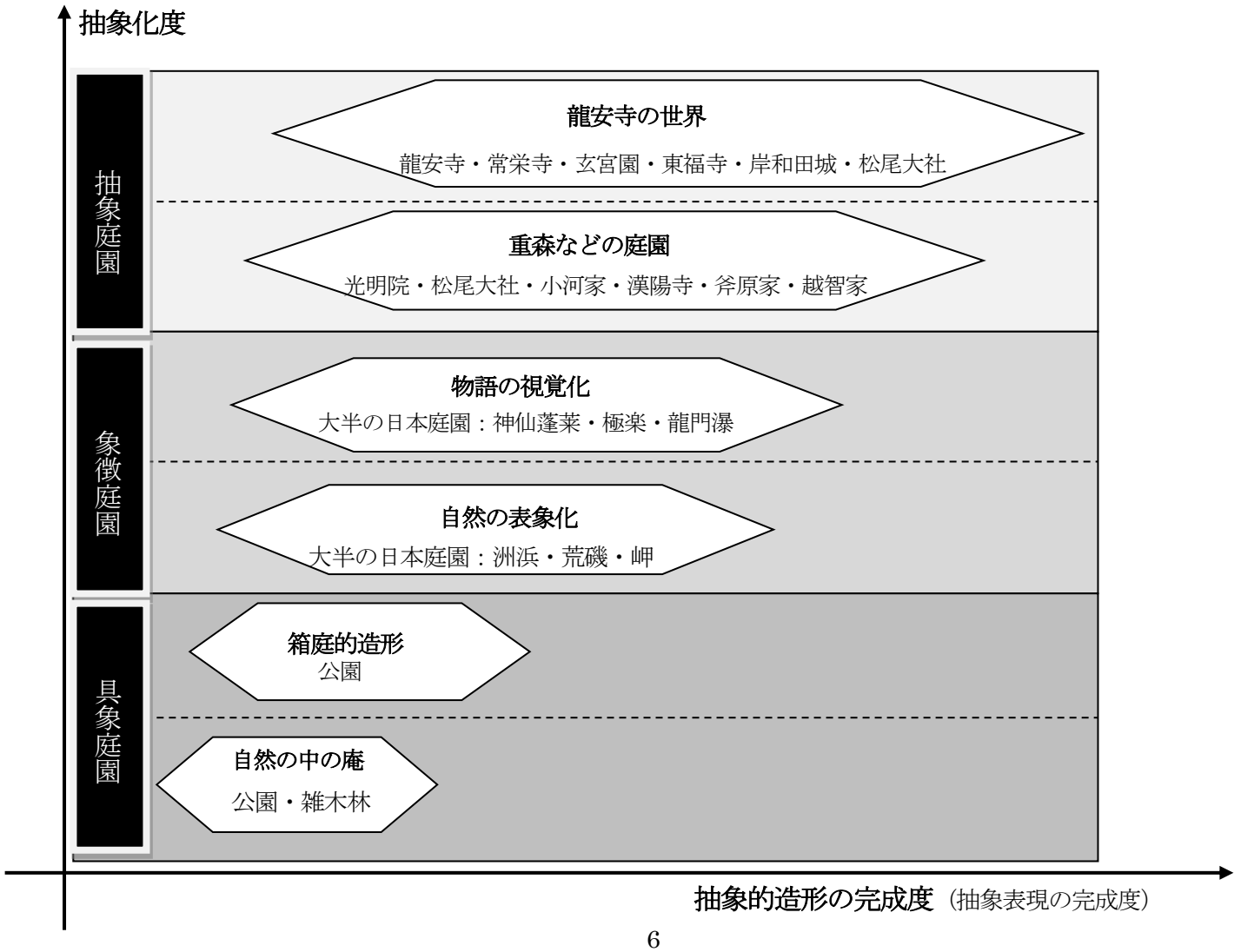
①人工的造形（重森の造形）

（自然の風景を高度に抽象し、自然には無い直線や曲線の形や色の造形）

②完全な抽象造形（自然の風景と関係ない龍安寺の世界）

4 抽象化度と造形の完成度に関する概念図

日本庭園は自然を取り込んだ具象的庭園から、次第に物語の視覚化や自然の表象化、即ち象徴化の方向に進んだ。さらに禅思想の影響もあってか抽象化された石組みは「空間構成美の庭」を完成させた。ただし、抽象化度の高い庭園は抽象思想を造形化することが困難なため､多くの日本庭園は下図に示したような象徴庭園の部類に属している。なお日本庭園は不可逆的に抽象化を目指したのではなく、試行錯誤の末、結果的に龍安寺のような完成度の高い抽象庭園に達したと思われる。なお、横軸に抽象造詣の完成度を入れたのは完成には困難さが伴うためだ。



3・2 庭園における抽象度の写真例

1 具象的造形

自然の風景を直接取り入他造形である。写実主義ともいえ、日本庭園ではほとんど存在しない。

①自然の中にある庵・東屋の風景（自然そのものを眺める田園風景）

②箱庭的に自然を模倣した造形（自然の要素を取捨選択せずに、あれこれ取り込んだ造形）

キュー王立ガーデン(ロンドン)

モンソー公園(パリ)

バガテル公園(フランス)

2 象徴的造形

①自然の風景をデフォルメした造形(洲浜・荒磯・遣水・曲水など)

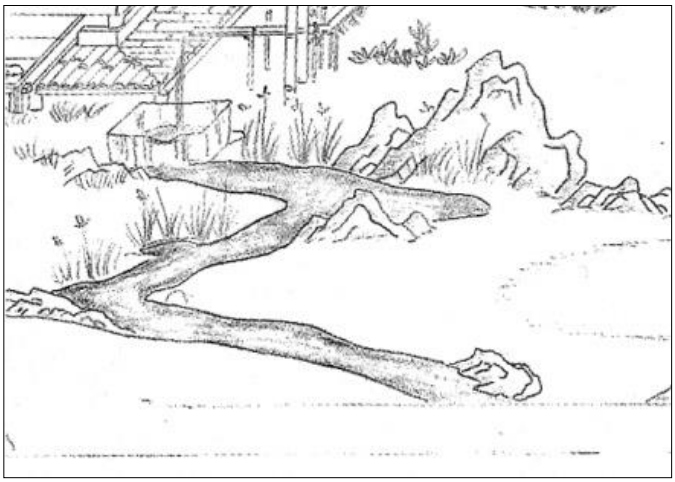
古来より自然の風景を造形化する試みがなされていた。特に洲浜・遣水・荒磯である。即ち囲まれた一定の面積に自然を取り込むためには、特定の印象深い対象を抽象する必要があった。

特に洲浜は景観に奥行きを与えると共に、極楽浄土の象徴とも見なされたため、池泉庭園には必ずと言っていいくらいに造形された。

東院 :洲浜

西芳寺:洲浜

毛越寺:遣水



法然上人絵図 : 遣水

②神話・仏典・禅語録などの物語を視覚化した造形（蓬莱山・須弥山・極楽・九山八海など）

中国では既に秦･漢の時代から神仙蓬莱の世界をこの世に再現した。日本でも神話の世界や、仏説など目に見えない架空の世界の物語を理解しやすくするために、象徴的な造形に視覚化したのである。

a 須弥山世界の造形: 須弥山は仏教の世界観の中心をなす

北畠神社：中央の石は須弥山で、その周りを螺旋状に取り巻いている石組みは九山を表し、全体で九山八海を象徴している。

東福寺：開山堂前には鶴亀蓬莱の庭がある。上記石組みは鶴島の羽石を造形しているが蓬莱山や須弥山も象徴していると思われる。

b 龍門瀑: 禅語録を造形化して碧巌録の物語などを可視化した。
ここには典型的、かつオリジナリティーの高い龍門瀑の例を示す

西芳寺：修業の場から鑑賞のための造形への過渡期の庭

碧巌寺：碧巌録の物語を完璧なまでに忠実に視覚化した庭。

常栄寺(雪舟寺)：7 段 20mにも及ぶ龍門瀑

保国寺：立石の中に斜めに造形された鯉魚石

3 抽象的造形

具象的・象徴的な造形ではなく、自然界や神話などを想起させない、抽象度の高い造形を例示する。

①においては、グラフィックデザイナーとしての重森のデザイン化された庭園の例を示す。

②においては具体的造形の庭園ではない、抽象性の高い庭園を古典庭園と重森庭園に分けて示す。

①人工的造形(重森三玲の例)

自然の野山や物語を高度に抽象し、自然には存在しない直線や曲線の形や色の造形の庭を作った。いわばグラフィックデザイナーとしての重森の造形は、比較的小面積の庭を変化のある興味深い庭にした。以下に a～e を例示。

a 洲浜の造形化: 重森は終生洲浜の造形化に努めた。そのきっかけは昭和 13 年に毛越寺の洲浜に触発された。

光明院(S14):枯山水に初めて取り込んだ洲浜

斧原家(S15):高度に抽象化された造形

松尾大社(S50):左右から三つの洲浜が交錯した遣水の造形。

b 網干・網代模様・の造形化

網干、網代、海波の造形は古からあるデザインであるが、庭園の造形として大胆に採用した。

小河家(S30):修学院離宮「中の茶屋」の欄干の影響

織田家(S32):庭園を取り巻く網代模様の洲浜

c 延段の造形化: 重森は個人宅においては延段を造形化したが、常に新しい造形を求めた。この延段を一目見ただけで重森の庭であることが解るほど個性的な造形である。なお、重森の越智家の延段の造形は桂離宮の「真の飛び石」にヒントを得たと思われる。

越智家(S32)

小河家(S35)

d 直線による造形

庭園に直線の造形が用いられたことは、ほとんど無いのではないだろうか。いわゆる寛げる庭にはならないからだろうか。日本での唯一の例外と言えば小堀遠州の仙洞御所くらいだろうか。ただしあまり評判が良くなかったため、現在のように改修されてしまった。

岸和田城の城郭デザイン(S28)

漢陽寺(S48)

e 直線で仕切る地割 :重森は自然界には存在しない直線の斜線を入れ、重森独自の造形を創作した。昭和 9 年の春日大社と四方家が初めてで、東福寺の方丈に先がけること 5 年である。この直線による仕切りは自然界には無い人工の造形を意図したのである。即ち芸術作品としての庭園を指向した。

春日大社(S9)

旧友琳会館(S44):霞型の出島の下には方身代わりの造形がある

②完全な抽象造形の庭：龍安寺の世界の系譜

具体的な自然物や象徴ではない、全くの人工的な造形で空間構成の優れた庭

A 古典庭園の例

常栄寺（山口市）：雪舟が作った庭と言われているが、鶴亀や自然の野山を全く想起させない立体空間の世界。立石を中心とした人工の造形美の世界だ。彼は完全に遠近法をマスターした水墨画の世界を庭園でも再現した。

保国寺（西条市）：立石と横石が織りなす空間構成美の世界だ。この造形から幾分か石を減らすと龍安寺の世界だ。

龍安寺（京都市）：日本庭園の到達点であり、出発点でもある。自然石を配置することで、自然を超えた宇宙の神秘を再現したとも言える。世界の至宝とも言うべきか。ただし、造園当初とは多くの点で異なっていることを考慮して仮想復元して再評価すべきと思う（向かって左側の土塀、正面の生い茂った木立、方丈建物の張り出しなど）。

願行寺（奈良県吉野郡下大市町寺内）：龍安寺の庭園構成に最も近い庭であろう。やや生い茂った草木を除去すれば、石組による抽象世界が出現するだろう。

玄宮園（彦根市）：大名庭園の最高峰。水の竜安寺とも言える気品と重厚さ。植栽が手入れをすれば最高の庭だ。

久留島家(大分県：栖鳳楼より見た抽象庭園

B 重森三玲庭園の例

東福寺（京都市）：重森の最初期の庭であるが、立石と横石を組み合わせた斬新な造形である。

岸和田城（岸和田市）：広大な敷地に地割された石組みは秀逸なテーマと幾何学的な造形で拡散と統合が図られた。

前垣家（東広島市）：小さな坪庭に組まれた抽象造形は見る者に創造を掻き立てる不思議な存在だ。まさに現代の龍安寺と言える。重森はこの石組のために、施主の所有する山に何度も入って、ようやくこの欠損部のある石を見つけた。この時点で庭は出来あがったのも同然だ。

松尾大社（京都市）：重森の遺作となった庭だ。重森は洲浜、延段、竹垣など多くの造形を創作したが、遺作となった作品は人為的な過度とも思える細かな細工から解き放たれ、立石のみの自由な空間を構成した。